

プロローグ 英国大使が爆笑した試写会での、ある発言

長州ファイブとは？

「長州ファイブ」という言葉をご存じだろうか。もともとは英語で Choshu Five といふ、そのまま日本語に当てているわけだが、「長州五傑」と表記される場合もある。長州とは、もちろん周防、長門（すおう、ながと）の二国、合わせて三六万余石の外様大名毛利家を藩主としたあの長州藩、現在の山口県のことであり、ファイブはその長州藩の五人のサムライをいう。

ではこの五人は誰かというと、井上馨（いのうえかおる）、伊藤博文（いとうひろぶみ）（俊輔）、山尾庸三（やまおようぞう）、遠藤謹助（えんどうきんすけ）、井上勝（いのうえまさる）のことである。このうち、明治の元勳といわれる井上馨や伊藤博文を知らない人はまずいないだろう。しかし、ほかの三人のうち、一人でも知っている人はよほどの歴史通、もしくは明治通ではないか。

どっこい、この山尾庸三、遠藤謹助、井上勝の三人は、知名度こそ井上馨や伊藤博文に劣るものの、二人に負けず劣らず、明治日本において、大変なことを成し遂げた驚くべき人たちな

のである。

時は幕末、文久三年（一八六三年）五月一二日。彼ら若き五人は、藩の命令で当時は幕府によつて固く禁じられていた海外渡航を決行する。密航である。まず小さな船で横浜から上海へシヤンハイと渡り、そこから別の船に乗り換えてロンドンに向かった。

本当は、上海から乗客としてそれなりに船旅を楽しむはずだった。その分の金は今回の渡航を請け負ってくれたイギリスの貿易会社の横浜支店にちゃんと払つてある。が、そこはまだ幕末、彼らの極端に貧弱な英語力のゆえ、上海からロンドン行の船に乗り込む際に、当の貿易会社の上海支店長との間でコミュニケーション上の齟齬そごが生じた。

結果、彼らは客ではなく船員としてこき使われることとなる。慣れない作業と、ひどい船酔いと、粗末な食事に苦しめられ、時には絶え間ない下痢にさいなまれ、おまけに寄港料をケチる船会社のせいで上海から一度も港に立ち寄らないまま、五人はふらふらぼろぼろになりながら、ロンドンに着いた。

新生日本のリーダーとなつた五人

そのイギリスの首都で、五人は後年夏目漱石そうせきやガンジー、近くは小泉純一郎元総理が学んだ

ことでも知られる、そして誠に僭越せんえつながら筆者の母校でもあるロンドンの進歩的な大学、ユニバシテイ・カレッジ・ロンドン、通称UCLユニバーセル (University College London) に入学する。そこで彼らは目を輝かせながら、UCLの好意的な雰囲気大いに助けられ、学究の徒となり近代文明を貪欲に吸収していく。

五人がイギリスを去る時期はそれぞれだったが、勉学を積み、どの日本人よりも早く近代への意識革命を成し遂げた彼らは、帰国後、全員が各自の分野で新生日本のリーダーとなっている。

井上馨は外務卿がいむきょう (大臣に相当) としてあの鹿鳴館時代を築き、さらには外務大臣として平等条約の改正に終始向き合っていく。伊藤博文は日本初の内閣総理大臣となり、生涯で都合四回、伊藤内閣を組み、文字通り明治日本のトップとなった。

他方、山尾庸三は工部省のトップとして日本の工業、造船界を牽引けんいんし、また盲啞もうあ学校の開設に尽力し、障がい者教育にも生涯をささげた。遠藤謹助は造幣局長として、お雇い外国人から「日本人なんぞに貨幣製造ができるものか」とばかり見下された悔しさをバネに、人材を育てながら見事日本人だけの手でそれを成し遂げた。今も春に多数の人々が花見に訪れる大阪造幣局の「桜の通り抜け」を考案したのも遠藤である。

そして、本物語で最もスポットライトを当てていくことになる井上勝は、これぞ文明開化のシンボルといふべき東京―横浜間の鉄道開設を皮切りに、鉄道庁長官として日本全国に鉄道網を広げること邁進した。

勝は晩年、病を押し、密かに遺書をしたためて、日本のさらなる鉄道発展のため、ヨーロッパへ鉄道視察に向かう。その旅先のロンドンで、彼は客死する。留学時代に世話になったUC Lの恩師夫人に看取られて。自分の歩む道を決めた青春の地で、最期を迎えたかったのかもしれない。そんな勝は後年、「鉄道の父」と称えられることになる。

「大攘夷」を行うために

二人が新生日本を率いる政治家となり、三人が近代日本を建設した技術官僚（テクノクラート）となった密航藩士「長州ファイブ」。彼らがイギリスへの長く荒い航海、ロンドンでの勉強の日々、そして帰国後にそれぞれが拓いていった道から誰一人として脱落することがなかったのは驚くべきことであり、奇跡ですらある。もちろんそれはこの五人が極めて優秀だったからだ。ただ、注目すべきはその優秀さの中身である。

彼らは、どんな資質を持っていたのだろうか。まず、彼らが密航した幕末の時代をしてみる。

文久三年頃は、外国船は追い払え、外国人は日本に来るなどする攘夷思想、さらには尊王攘夷思想が勢いを増していた。そんな中であつて五人を「夷狄の本陣」であるイギリスに、勉強のために送り出した長州藩の行動は、攘夷どころか、その真逆の開明・開国的なものにすら見える。

じつはそうではない。五人が上海に向けて横浜を出港する一日前から、当の長州藩は下関砲台から沖を通るアメリカ、フランス、オランダの艦船に大砲をぶつ放している。日本史にいう「攘夷の決行」である。ただ、密航のため幕府の役人に見つかからないように出港当日の夜から横浜港で船底にじつと潜んでいた五人は、自藩のこの行為を知る由もなかったが。

要するに長州藩が五人をイギリスに送つたのは、攘夷という考え方のオプションの一つである「大攘夷」を実行するためだった。大攘夷とは、攘夷を実行するための戦略的な考え方である。

——攘夷で一時的に武威を示せたとしても、結局それはわが方に不利益になるだけである。時勢を見るに外国と交わるのはもはや必至である。ならばその日に備えて西洋の事情を知っておかねばならない。そのために藩の人間を外国に派遣して西洋の文化と技術を吸収させ、帰国

したその者たちの知識をもってわが方を強化した後にこそ、完全な攘夷が実行できる——

これが大攘夷である。開国や外国との交流は否定しない。その上で、外国を追い払うという。まあ、今から考えればなんとも幼稚で身勝手な発想である。ちなみに、従来 of 異国人は何でもかんでも追い払え、やっつけろという典型的なイメージの攘夷を「小攘夷」ともいう。

へえー、攘夷にもいろいろあってさすがカオスの幕末だなあと、今でこそ面白がって、半分呆れて眺めてはいられるものの、この大攘夷に基づいて長州藩は大まじめで自藩の五人を幕府に内緒でイギリスに派遣してしまったのだから、当時としてはじつに大胆かつ大変なことをしでかしたわけだ。

しかるにその結果、日本に帰ってきた彼らが全員、当初の目的、長州藩が期待した大攘夷の実行どころか、遥かにスケールの大きい近代日本建設のための大仕事を成し遂げてしまうのだから、現実の歴史の進み方とはなんとダイナミックなことか。

英国大使館での試写会

とにかく、こんな幕末の状況だったから、イギリスにいろいろな技術や学問を学びに行くた

めに選ばれた彼ら五人の中にも、過激な攘夷活動にすでに手を染めている者もいた。じつはそれを知ることができる面白いエピソードがある。二〇〇六年六月一九日、東京半蔵門の駐日英国大使館で映画『長州ファイブ』の試写会が行われた時のことだ。

少し説明すると、『長州ファイブ』は山口県の萩市や下関市の企業や市民、団体が協力し製作された五人のイギリス行を描いた作品である。監督は五十嵐匠、井上馨役に北村有起哉、山尾庸三役に松田龍平、また佐久間象山役に泉谷しげる、高杉晋作役に寺島進を配するなど、なかなかの俳優陣であり、冒頭の衝撃的な生麦事件のシーンやロンドンで五人が初めて汽車に乗り、驚愕のため声が出ない場面など、見応えもそこそこあり個人的には気に入っていた。

ただし、旧長州藩の山口県の人々が力を入れたローカルなPR映画のような印象は拭えず、また日本を何とかしたいとの思いが募る長州ファイブのメンバーが、その鬱積したエネルギーのはけ口としてやたらに安女郎屋に通うという、映画表現としては陳腐な描写も前半に目立った。結果的には松田龍平が出ていたにしては、また泉谷しげるの怪演の割には、残念だけれどあまり話題にならなかった。

もともと海外での評判はよく、二〇〇七年の第四〇回ワールドフェスト・ヒューストン国際映画祭ではグランプリを獲得している。外国人にはやれ長州藩だ山口県だという日本の歴史や

事情はわからないから、純粹に映画を評価できるのだろう。安女郎屋の場面も、あれはあれで日本的だとして案外受けたのかもしれない。もちろんDVDは出ているので、ネットで手に入れて楽しんでみるのもいい。

「ご子孫たちの「お詫び」」

話を戻すと、この『長州ファイブ』の一般公開に先立つ試写会が英国大使館の大使公邸で開かれたのであり、当日は会場に長州ファイブのご子孫の方々も数名招待されていた。筆者もUCI同窓生の一人としてその場にいたのだが、映画上映に先立ってスクリーンの前に横一列に並んで立たれていたご子孫たちの紹介があった。その折のことである。その中のある一人の若い男性が、ちょっといい出しにくそうにこう口を開いた。

「そのう、あの時は申し訳ありませんでした。私たちの先祖が英国公使館を燃やしてしまいまして……」

とたん、時のグレアム・フライ駐日英国大使や居並ぶ大使館の面々が大爆笑。会場が一気に

和やかな雰囲気にも包まれた。

そう、江戸品川に完成間近の英国公使館が高杉晋作、久坂玄瑞くさかげんずいらが率いる一二名の攘夷派長州藩士によって焼き討ちされ、黒焦げになってしまったのは、試写会の日から一四三年前の文久二年一二月一二日（一八六三年一月三十一日）夜半のことだ。この焼き討ちをかけた一二名の中に、長州ファイブのうちの三人、すなわち井上馨、伊藤博文、山尾庸三がいた。それでご子孫たちの「お詫び」発言となったわけだ。もちろんもうとつくに時効であり笑い話だが、五人の中に過激な攘夷主義者がいたことがこれでよくわかる。

上海でのシヨック

しかし彼らがすごかったのは、そんな行動の原点だった攘夷を、簡単に捨て去ってしまったことである。

横浜から密かに出港した五人が、ロンドンの遙か手前の上海で目の当たりにしたのは、欧米列強の圧倒的なプレゼンスだった。この頃の上海はアヘン戦争後に結ばれた南京条約ナシキンによってイギリスに開港され同国の租界、つまり治外法権の居留地が設けられていた。

またイギリスに倣ってアメリカやフランスも次々と租界を設置し、欧米列強の東アジアにお

ける一大拠点として上海は変貌しつつあった。街には欧米の商社、金融会社、新聞社などの建物が並び、港は一〇〇隻を優に超える欧米の艦船で埋め尽くされていた。これを見て五人は即座に、いやはや攘夷なんぞとうてい無理と、悟ってしまう。

「従来の迷夢は頓に覚醒した」^{*1}

『世外井上公伝』（第一巻。ルビは筆者）には、井上馨がこういったと書かれている。しかし、よくいう、である。ここ上海に来るほんの五カ月前、英国公使館を丸焼きにしたのは誰だ。こんな簡単に攘夷を放棄してしまつていいのか、こら、こら！と突っ込みを入れたくなる。

でもまあ、考えてみればこの変わりようは、よくわかる。実際、この頃攘夷を叫んでいた者のうち、何人が欧米人や外国船を見たことがあつただろう。見たとしても、せいぜい数人程度の欧米人か、一、二隻程度の外国船で、上海のような欧米のプレゼンスが圧倒的な状況は、当時の日本人には毫も想像できなかつたろう。

現在だって、筆者など電車の中で外国人が向かいに座っていたら、何か妙にそわそわして、ついチラチラと視線を送つたりする。留学でイギリスに住んでいたことがあるのに、ヘンだな

あとは感じるが。

ましてや幕末である。ほとんどのサムライが、外国人や外国船を見たことがないまま、つまり敵を見たこともなければ、その真の力さえ知らないまま、攘夷を叫んでいる。できるものだと信じ込んで。いかに攘夷が現実からまったく遊離した観念的なスローガンだったか。

だから長州ファイブは青くなった。せいぜいが数隻程度の外国船しか見たことがなかった彼らにとって、上海の港を埋め尽くす信じられない数の軍艦と、そこに搭載された大砲の膨大な数を目の前にして、しかもこれらはまだ欧米勢力の一部でしかないという事実を察するに及んで、自分たちが抱いていた考えの無謀さ、底の浅さに愕然とした。そして、「豹変」した。欧米に敵うはずがない。彼らに学ぶぞ、と。

先に五人が帰国後、各自が拓いていった道から誰一人として脱落することがなかったのは驚くべきことであり、奇跡ですらあると書いた。また、それは五人がイギリス留学に選ばれただけあつてもともと優秀な人材揃いだっただことにあるが、注目すべきはその優秀さの中身だ、ともいった。その優秀さの中身こそ、現実を見て攘夷と決別することができた彼らのこの豹変ぶりなのである。

つまり五人は、「素直さ」と「柔軟性」という、何でも学ばなければならない日本の夜明け

を担う留学生として、最高の資質を備えていたということだ。考えてみれば、日本にとってこんな幸運はなかった。

もつとも井上勝と遠藤謹助は、攘夷活動には浸かっていたので、ここ上海で目撃したことは、この二人にとってはイギリスで学ぶ情熱をさらに高めたことだろう。また伊藤博文に關しては、この上海ではそんなにあっさりとは攘夷を捨てられなかったようだ。ただ、ロンドンでは、彼らは全員素直な留学生となっていたことは確かである。

すべての学生を受け入れた大学

もう一つ。じつはこれが最大の要因かもしれない。彼ら五人が帰国後、明治日本を牽引するリーダーになれたのは、UCLという革新的な大学がイギリスにあったからである。

UCLは長州の五人組がロンドンに来る三七年前の一八二六年に創立された、イギリスで三番目に古い大学だ。このUCLができるまでは、イギリスにはオックスフォードとケンブリッジの二つの大学しかなく、しかも両校に進学できるのはアングリカン (anglican)、すなわち英国国教徒のみだった。カソリックやプロテスタントのルーテル派といったほかの教派、むしろキリスト教以外の信者は大学に入りたくとも、たとえ資産があっても駄目だった。つまり、学

問には「差別」があった。

そうした中、非アングリカンにも、海外の人間にも広く門戸を開いたのがアンチ・オックスブリッジを旗印に掲げた自由、反骨、無宗教の大学、UCLだった。そんなUCLにとつて開校以来最も早期に海外から迎え入れた学生が、日本からの長州ファイブだった。だから Choshu Five という言葉は、UCLで誕生したのである。

この日本からの留学生を受け入れたことを、UCLは爾来^{じらい}ずっと誇りに思っていて、二〇一三年七月三日には、「長州ファイブ来英一五〇周年」(150th anniversary of the arrival of the 'Choshu Five' in the UK) を記念した式典が同大学で盛大に開かれている。この時は日本在住の同窓生も、本部との連絡やらイベントの企画やら何やらでそこそこバタバタした。

もし、UCLがなかったら、どうだったか。既述の如く^{ごと}この時代、オックスフォードとケンブリッジの両大学にはアングリカンしか入れず、したがって井上馨、伊藤博文、山尾庸三、遠藤謹助、井上勝の五人は、西洋先端文明に直接触れ、その知識・技術を習得し、封建日本から近代主義へと自らの意識革命を行うことができる場を持ちたくとも持ちようがなかったことになる。

いや、そもそもUCLという大学があったことが、五人をイギリスに勉学のために送る話の

前提になったとも推察できる。もしUCLがなかったら、渡航計画自体が存在していたかどうか。まさに日本の夜明けという絶妙のタイミングに、絶妙の大学がイギリスにあった。そういう意味で、近代日本と学問の自由・門戸開放を掲げたイギリスの反骨の大学UCLは、限りなく深い絆きずなで結ばれている。そして、それは今もずっと続いているのである。

と、前置きが長くなった。この物語で彼ら長州ファイブの歩んだ道を、とりあえず筆者の好きな井上勝をメインに、でもほかの四人もしっかり追い、併せてUCLのことも追々紹介していきたいと考えている。

もとより、途中で面白いエピソードや人物が出てきたら、勝手にどんどん寄り道してしまうつもりである。ゆえにどうまとまっていくなかは、さあ、さっぱりわからない。ともかく読んでいて飽きないものにはする気であるので、どうかお付き合いを。

*1 本稿では、史料等の引用文中の旧仮名、旧漢字は、それぞれ現代仮名、新字へと直している。